

口承文芸と言語継承——アンデス高地の現場から

藤田 護 (FUJITA, Mamoru)

Taller de Historia Oral Andina (THOA)、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部

2025 年 12 月 20 日

1. アンデス高地の先住民言語の言語状況

1.1 アンデス高地における話者数の多い先住民言語——ケチュア語とアイマラ語——

Howard, Rosaleen (2023) *Multilingualism in the Andes: Policies, Politics, Power*. New York and London: Routledge.

(1) 国勢調査 (censo nacional) の結果 (Howard 2023, p.39)

エクアドル	1990 年	2001 年	2010 年
キチュア語	347,263 (3%)	499,292 (4.10%)	591,448 (4.08%)
ペルー	1993 年	2007 年	2017 年
ケチュア語	3,177,938 (16.6%)	3,360,331 (13.03%)	3,799,780 (13.6%)
アイマラ語	440,380 (2.3%)	434,370 (1.8%)	450,010 (1.61%)
ボリビア	1992 年	2001 年	2012 年
ケチュア語	1,085,800 (16.9%)	2,124,040 (25.7%)	1,656,978 (16.5%)
アイマラ語	1,237,700 (19.3%)	1,462,300 (17.7%)	1,191,352 (11.8%)

注意——ボリビアの話者・人口比の計算に明らかな誤りがあるので、この部分のみ発表者が計算をし直した (前提) 先住民言語に関する質問項目は、(1) その社会的地位の低さから、実際に話せるのに「話せない」と回答する人数が相当数いるはずだと予想される。(2) 質問項目の配置の順番や、その時の政治状況により回答が大きく左右される。(ボリビアの 2012 年の国勢調査はその精度にも疑義が呈されている。)

→それぞれの言語で話者数は微増しているようだ。話者数の対人口比は微減しているようだが微増しているときもある

→この事実が 1990 年以降の国勢調査を通じて確認されたことは——先住民言語が今後とも消滅することはないという意味で——先住民言語の維持と再活性化に向けての社会全体の認識を変える一助となった

(2) 憲法上の各国での先住民言語の地位 (Howard 2023, p.55)

エクアドル——2008 年憲法、スペイン語がエクアドルの公用語、スペイン語とケチュア語とシュアール語が「異文化間関係の公用語」、それ以外の言語は先住民によって「自らが居住する地域で使用される公用語」
ペルー——1993 年憲法、公用語はスペイン語に加え、「話者が支配的である地域で」ケチュア語とアイマラ語とその他の先住民言語

ボリビア——2009 年憲法、公用語はスペイン語と全ての先住民言語 (憲法の条文に列挙されている)、中央政府と州政府に少なくとも 2 つの公用語を用いることを義務づける

→地域的な限定がないという点で、ボリビアにおける先住民言語の憲法上の位置は他国より進んでいる

1970 年代～1980 年代 先住民運動の興隆(先住民の「回帰(retorno)」)

→1990 年代に先住民が公共の場で存在感を示し始める——ボリビア、エクアドル、メキシコ(サパティスタ叛乱)
1992 年コロンブス(クリストバル・コロン)によるアメリカ大陸侵攻 500 年

1990 年代～2000 年代 ラテンアメリカにおける多文化主義、異文化間相互性、複数民族国家の時代

アンデスにおける新憲法制定による多文化性や複数民族性の承認(1990 年代～2000 年代)

→複数民族・多文化(pluriétnico-multicultural, pluri-multi)→異文化間相互性(interculturalidad)

→先住民が自らのことをナシオン(nación「民族」)だと表現するように→複数民族国家(estado plurinacional)

→多文明的性格(la condición multi-civilizacional)

(文献情報は岩堀卓也・パリーク亜美・藤田護・大木聖子(2021)「ラテンアメリカの多文化主義政策と日本の防災教育ワークショップの交わる地点で——メキシコとペルーにおける災害認識とナラティブ、コミュニケーターの役割、先住民知と近代科学技術の関わり」『Keio SFC Journal』第 21 巻第 2 号、pp.144-167 の第 2 章を参照)

2010 年代～2020 年代 社会運動・先住民運動の拡大??、先住民言語の時代??

チリの社会暴発(estallido social、2019 年)

→制憲議会(asamblea constituyente)の招集、マプーチェの女性知識人が議長に

ペルーの社会暴発(2022 年)

新憲法制定による先住民言語の公用語化(前述)

公職における先住民言語の義務化(ボリビアでは 2017 年法令第 1197 号)

(参考——スペインにおける地域言語の義務化)

言語再活性化(revitalización lingüística)、新話者(neohablantes)、都市での先住民言語継承への関心

様々な文化領域における先住民言語の公共領域への再登場

映画——例:*La teta asustada*(2009 年、邦題『悲しみのミルク』)、同年ベルリン映画祭金熊賞受賞

主演マガリー・ソリエル(Magaly Solier)が授賞式においてケチュア語を話し、ケチュア語で歌を歌う

YouTube: <https://youtu.be/3lBVIiU6xJw?si=Nrs4vrC7kJjYDuDO>

文学——ケチュア語詩、アイマラ語詩のアンソロジーの出版→地域ベースの流通から国・グローバル流通へ

先住民言語による小説の持続的出版(ペルーPakarina Ediciones)、先住民言語文学賞(ボリビア)

公共のイベント——司会のケチュア語・スペイン語、アイマラ語・スペイン語での二言語掛け合い方式が主流化

音楽——新たな先住民言語ポップス(Q-pop)、アイマラ語ラッパーと 2Pac(Tupac Shakur)

(最後の点については——Swinehart, Karl (2024) *Voice and Nation in Plurinational Bolivia: Aymara Radio and Song in an Age of Pachakuti*. London, New York, and Dublin: Bloomsbury Publishing.)

1.2 アンデス高地には話者数の少ない先住民言語がある——ウル諸語とハカル語——

※以下の見出しの数字は、下に掲げた地図上の番号と対応している

(6)ハカル語／カウキ語(jaqaru/kawki)——ペルーの首都リマがあるリマ県の南部山間部で話される、話者数は 100 人を切っている、アイマラ語と同系統の言語である

(8) (9)ウル系言語((8)ウチュマタク語(uchumataqu)、(9)ウルチパヤ語(uru-chipaya)、)——ボリビアの西部高原のチチカカ湖からポーポ湖に至る水系の周辺で話される、ウルチパヤ語は話者数約 1000 人で安定している、ウチュマタク語は流暢な話者がいなくなってしまった。ケチュアとアイマラは農耕牧畜民であるが、ウルは狩猟採集民で、特にアイマラから差別・抑圧を受けてきた

ウチュマタク語は 2009 年ボリビア憲法でも公用語に入っておらず、公用語としての承認を目指している。かつての記録をもとに言語の再建を目指している→日本社会においてアイヌ語が置かれた状況に似ている

(7)カリヤワヤ(callahuaya)——チチカカ湖東岸を中心に話される、ベースはケチュア語だが既に消滅したズキナ語の語彙が含まれている



Map 4 The Inca Sphere: approximate distribution of indigenous languages in the mid twentieth century

地図の出典——Adelaar, Willem F. H. with Pieter C. Muysken (2004). *The Languages of the Andes*. Cambridge and New York: Cambridge University Press, p.169.

2. アンデス先住民言語と言語継承

2.1 言語継承の困難の大きさ

農村や地方の小さな町においては、それぞれの先住民言語を使ったモノリンガルな生活が続いている
都市に移住してきた者たちのあいだでは、世代を経るにしたがって先住民言語が話されなくなっていく
〈参考〉家庭で継承されていなくても学習運動や公教育を通じて言語が再獲得されていく、バスク語やマオリ語の
ような「新話者(neohablante)」現象は、アンデス高地ではそれほど目立って見ることがない
都市をベースにした専門職業家層(profesionales: 学校教師、NGO ワーカー、保健所スタッフ)のケチュア語が、
農村のケチュア語話者を見下す構造が存在する(Mannheim, Bruce y Margarita Huayhua. 2016. “El quechua
es un idioma multi-registral.” En Centro de Estudios Regionales Andinos Bartolomé de las Casas (CBC).
Foro Dilemas de la Gobernabilidad en el Sur Andino al 2021. Cusco: CBC, pgs.152-156.)
→この現象はアイマラ語圏ではそれほど見られない

“THOA: Experiencias, aportes y desafíos en la descolonización de la metodología de la investigación”
Canal YouTube “Pikaltulti”, 19 de septiembre de 2025

https://www.youtube.com/live/9GliE--HSfU?si=dq1bAyiplVrdNa_2

フィロメナ・ニナ・ワルカチョ(Filomena Nina Huaracacho、THOA の初期メンバーの一人)による発言(16:47-)
Näxa Italaqi sataw, uksankirīt, ukjan yurirītwa. Ukat qhipat akan yatiqiriw jutta, aka iskuylaruw, ukat
colegioruw, ukjan ukat juk’at juk’ata aymar armasxt. “Janiwa aymarat parlxapxit”, aymaraxa janiw
walikānti, janiw wakiskānti, aymarat parlañaxa iskuylan. Ukjan “prohibido” sapxān, janiw arsuñākit, janiw
arūkit, sas. Ukat armasirīt akan. Taqinisa, taqinisa khitinakatix akanktanxa, aymara parliřipachānwa,
achachilasa, awichasa, laq’a awichasa, laq’a achichilanakasasa, pero juk’at juk’at armasxtanx.
Yaqhipanakax janiw yatxpachati, yaqhipanakax q’allut parlxpacha.
[日本語訳]私はイタラケと呼ばれる、そこの出身で、そこで生まれた。それから後になってここ[ラパス市に]学校
に通うために来て、ここで小学校で、そして中等学校で、そこで少しずつアイマラ語をもう忘れていった。
「アイマラ語で私に話しかけるな」、アイマラ語は良くないことで、必要とされていなかった、アイマラ語で話すこと
が学校ではね。そこでは「禁止だ」と人々が言った、言葉を発してはいけない、それは言葉ではないと言いながら。
それで忘れていったんだ。皆が、ここにいる私たち皆が、アイマラ語を話していただろう、我々のおじいさんが、お
ばあさんが、そのもっと前のおばあさんが、おじいさんが、でも少しずつ私たちはもう忘れてしまった。もう
言葉を知らない人もいだろう、つかえつかえ話す人もいだろう。

2.2 言語継承の新しいネットワーク形成

実際に言語再活性化に取り組む機関(FunPROEIB Andes)の周囲では、様々な先住民言語での子育てを工夫
する新しい取り組みのネットワークが形成されてもいる

Sichra, Inge ed. (2016) *¿Ser o no ser bilingüe? Lenguas indígenas en familias urbanas*. Cochabamba:
FUNPROEIB Andes y La Paz: Plural Editores.

“Revitalización de lenguas indígenas en familias urbanas”

Canal YouTube “FUNPROEIB Andes”, 3 de diciembre de 2015

<https://youtu.be/MK6jcFx9WvU?si=ghwAxpJkgQ3vNkZW>

(14:05-) “Les escuché las experiencias de mamás revitalizadoras, entonces es como que me cambia la mirada esta charla, y a partir de ahí surge la idea, el deseo, la iniciativa, ¿no? Era también frustrante para mí porque yo no tengo pues, yo no tengo la lengua, no estaba en mí. Y le dije a mi mamá, le dije que le hablara a ella. Y a mi abuelita, y le dije a ella que me hablara a mí, que hablara a la Marlene en aymara, y la primera reacción de mi abuelita esa vez fue: “¿por qué te voy a hablar yo en aymara, si a vos tus papás no te han enseñado, por qué yo te tengo que hablar?”. Y bueno, aunque me había dicho eso, yo sabía que le hablaba. Ahora mismo ellas mi mamá, se dirige a ella en aymara, mi abuelita también.”

→先住民言語の新しい「領域性(territorialidad)」(領域と、領域への意味づけ)が生まれつつある

(Sichra, Inge (2019) “Habitar el habla como territorio. Nuevas dinámicas territoriales indígena.” *Cuadernos del Instituto Nacional de Antropología y Pensamiento Latinoamericano*, Vol.28, Núm.2, (Buenos Aires): pp.63-83.

2.3 日常生活で話されなくなった言語の再活性化——イルイト村におけるウチュマタク語

- ウル系言語のウチュマタク語は、チチカカ湖から流れ出るデスアグアデロ川沿いにあるイルイト村(Iru Itu、スペイン語では Irohito)でのみ話されてきている言語である(隣接する村は早い段階でアイマラ語化された)
- 最後の流暢な母語話者は今世紀初頭に死去しているが、村においてもこれらの話者たちの記録がとられており、20 世紀を通じた外国の言語学者による記録・記述もおこなわれてきた

(Hanss, Katja (2008) *Uchumataqu The Lost Language of the Urus of Bolivia. A Grammatical Description of the Language as Documented between 1894 and 1952*. Leiden: CNWS Publications.)

- チチカカ湖—ポーポ湖水系に沿って点在するウル系民族の組織化(“Nación Originaria Uru”)の進展
- ボリビア教育省からイルイト村に言語再活性化を担当する役職 1 名分の予算がつく

Video “Experiencias de revitalización de lenguas indígenas 2022” Comunicadores Productores Patrimonio Cultural y Taller de Historia Oral Andina (THOA)

Canal YouTube “Cholita Errante” <https://youtu.be/QD3xaCEp8po?si=cFokkViEMAQy1XAK>

(1) Poesía escolar recitada en uchumataqu (0:53-)

(2) Testimonio de la comunaria ayudante del proyecto (1:06:55-):

“Cuando era yo niña, conocía a las tías que hablaban nuestra idioma uchumataqu ¿no ve?, y yo esos momentos, yo no me daba cuenta. Yo pensé que era una lengua este..... lo mismo que el aymará yo así pensaba, ¿no ve?, y poco a poco yo crecí, y se ponían así ropas extrañas. Yo cuando era pequeño, yo no he utilizado digamos esas ropas que tenemos, que hoy en día nos ponemos. Y cuando crecí, crecí y cuando estaba en la secundaria, igual parece que nosotros teníamos miedo de hablar ese otro idioma uchumataqu también, teníamos vergüenza de ponerse nuestra ropa. Es que los aymarás siempre nos discriminaban

diciendo “ah, este es uru imilla” diciendo, “de uru es”, “uru imilla”. Con ese palabra parece que nos discriminaban a nosotros, “ese es uru warmi es”, “uru chacha es”, “son urus”, “uruchis son” nos decían. Yo decía “por qué nos dirá así” diciendo. Pero no había sido, eso verdad había sido nuestra lengua, nuestra cultura. Todo había sido verdad, no había sido nada de otro, nada extraño.”

[日本語訳] 私が子どもだった頃、知っているおばさんたちが我々のウチュマタク語を話していたんだよね、で私はその頃はまだ気づいていなかった。私はこれがアイマラ語と同じだと、そう考えていたんだよね。そして少しずつ成長していった、人々はこう変な衣服を身につけていた。私は小さかった頃に、我々の衣服を、今日われわれが身につける衣服を着たことがなかったんだ。大きくなって、中等学校に入ったとき、我々はこのもう一つのウチュマタク語を話すのに恐怖を感じていたと思う。同じように自分たちの衣服を身につけることも怖かった。というのは、アイマラの人たちがいつも我々を差別して、「ああこれはウルの娘だ」と、「ウルだ」「ウルの娘」と。こういう言葉で私たちを差別していたんだと思う「そいつはウルの女だ」「ウルの男だ」「ウルだ」「ウルチの奴らだ」と我々に言ったものだ。私は何でそんなこと言ってくるんだろうと思っていた。でもそうではなかったんだ、それは私たちの言語、私たちの文化だったんだ。その全てが本当のことで、何も他の変なものではなかったんだ。

→アイマラの南アンデス進出以前からの居住民族としてのアイマラからの差別の経験、多重的な差別構造の中での民族意識の復興、自治の進展、言語の再活性化の取り組み

→日本におけるアイヌ語の言語再活性化の課題に状況として似ているのではないだろうか？

3. 言語継承と口承文芸

「継承」とは何を継承するのか？

口承文芸(口頭文芸)は人々の社会イメージ(social imaginary)を共有・伝達する知の体系である

(Bruce Mannheim (2016) “The Social Imaginary, Unspoken in Verbal Art.” In Nancy Bonvillian ed. *The Routledge Handbook of Linguistic Anthropology*. London and New York: Routledge, pp.44-61.)

アンデスにおいて「歌」は個人や社会の記憶を伝達・伝承する役割を果たしてきた

(Harrison, Regina (1989) *Signs, Songs, and Memory in the Andes: Translating Quechua Language and Culture*. Austin: University of Texas Press.)

アンデス高地のアイマラ語の口承文芸は、アンデスの織物や「チヌ」(縄目による記録技術、ケチュア語では「キプ」と呼ばれる)になぞらえることができる

Arnold, Denise Y., Domingo Jiménez Aruquipa, y Juan de Dios Yapita (2014[1992]). *Hacia un orden andino de las cosas: Tres pistas de los Andes meridionales* (tercera edición). La Paz: Instituto de Lengua y Cultura Aymara y Fundación Xavier Albó.

藤田護(2014)「ボリビア・アンデスにおけるアイマラ語口承文学の躍動——ラパス市周辺の溪谷部における語りから」『イベロアメリカ研究』第36巻第1号、pp.27-51。

N: narradorx(語り手)、A: antepasados(祖先)、I: imillas(女の子たち)、S: serpiente(蛇)

(A) Kataris jaqiriw El vívora más sabe ser gente, 蛇も人間になったりするもんだ

(N) siw.	dice.	と言う。
(A) Q' alituriw uka	Desnudito sabe ser ese,	裸でいるもんだ
(N) sika*.	dice.	と言う。
(I) Kawkinkarakta q' alitu	¿Dónde estás pues desnudito?	「どこにいるんだい裸のお前は？」
(A) siriw.	sabe decir.	と言うもんだ
(A) Imillanakar jikjatir	Sabe encontrarse con las chicas,	女の子たちと会ったりするもんだ
(N) sika.	dice.	と言う。
(A) Imillanaka parlay.	Las chicas hablan.	女の子たちが話す。
(I) Kawkinkarakta	Dónde estás pues?	「お前は一体どこにいるんだい？」
(S) Nā aka manqhankta	Yo estoy aquí adentro,	「僕はこの中の方にいるんだ」
(A) siriw	sabe decir.	と言うもんだ
(S) nā jutani	Yo voy a venir.	「今いくよ」
(I) Iyaw	Ya pues.	「うん分かった」
(S) Mā ch' ankha muruq' u		
churasitay	Me darás una bola de hilos,	「糸玉を 1 つ私におくれ」
(A) siriw	sabe decir,	と言うもんだ、
(N) sika.	dice.	と言う。

※テキストは Arnold et al. (2014[1992])を藤田が再解釈したもの

→複数の層を経て伝承されてきた声の糸を現在の語り手が縫い合わせるという、言葉の「わざ」(「言語態」)がここではたらいっているのではないか

(藤井貞和(2001)「創意が踊る舞台の言語」藤井貞和、エリス俊子編『シリーズ言語態2——創発的言語態』東京大学出版会、pp.1-6。)

→「蛇」が発話した内容が「女の子たち」を通じて「祖先たち」の耳に達し、その「祖先たち」から「語り手」へと言葉が伝えられていく、という伝承の多層性

→伝承経路の末端に位置する「語り手」が、テキストを構成する素材である声という糸を手繰り寄せつつ、すなわち複数の時代を手繰り寄せつつ、語りを展開している

口承文芸はその社会の知識体系を構成しており、このような知識にはその言語独特の文体がある(ただしアンデス高地のアイマラ語やケチュア語の口承文芸の文体は日本語の口承文芸の文体と似ている(そしてアイヌ語の口承文芸の文体と異なる))→「知識」と「文体」をどのように継承していくかという課題がある

(おわり)